

6 歌川 広重

鞠子 名物茶屋（後版）



日本橋から京都へ至る宿駅を描いた広重の「東海道五拾三次」は特に人気が高く、天保4(1833)年の保永堂版は季節感豊かな全55図で知られる。本図は名物のとろろ汁で知られた鞠子宿の茶店。芭蕉の句を思わせるように、店先の梅がほころび、薄紅色の空が早春の穏やかな気配を伝えている。本シリーズには7図の後版が確認されており、本図もその一つで、初期の「丸子」が後に「鞠子」へ改められたものである。(22.6×35.5)

7 葛飾 北斎

武州千住



北斎の代表作「富嶽三十六景」の一図で、日光街道・奥州街道の第一の宿場として栄えた千住からの景観を描いたものである。千住は隅田川の上流に位置し、荒川と綾瀬川が合流する地点から富士山を望むことができたと伝えられている。本図において北斎は、仕事の合間に富士を眺める馬子(まご)の姿を、豊かな表現力で描き出している。手前に配された水門が幾何学的な構図を形成し、その隙間から見える富士へ視線を誘導することで、その美しさを一層際立たせている。(26.0×37.9)

8 歌川 広重

雪中椿に雀



広重は、天保前期頃(1830-1832)に大短冊判の縦長の画面に賛の句を添えた花鳥画の優品を数多く残している。本作では、柔らかく雪が積もった椿の花の周りで遊ぶ2羽の雀を描いている。和紙の地の色で表現された白い雪と真っ赤な椿の花のコントラストが極めて美しい。また、雀の羽根には絵の具をつけずに摺ることで紙に凹凸をつける「空摺」が施されている。賛の句は「烏鳶争食雀争窠 独立池辺風雪多」。(38.7×17.6)

4 喜多川 歌麿

浮気の相



浮世絵の黄金期に美人画の第一人者として名を広めた喜多川歌麿の出世作「婦人相学十躰」シリーズの一図である。版元・蔦屋重三郎の企画のもと出版された本シリーズでは、歌麿が女性の人相を巧みに描き分けることに挑戦している。湯上りの女性が肩にかけた手拭いに手を添えて振り返るという、何気ない仕草と愛らしい表情が艶やかに美しく描かれており、歌麿の卓越した描写力が遺憾なく発揮されている。背景には白雲母が施され、美人像をいっそう引き立てている。(38.8×26.2)

5 東洲斎 写楽

三代目市川高麗蔵 志賀大七



寛政6年(1794)5月、桐座で上演された「敵討乗合話(かたきうちのりあいばなし)」に取材した作品である。悪役の名手として知られた三代目市川高麗蔵が演じる「志賀大七」を描いている。宮城野・しのぶ姉妹が父・松下造酒之進の敵討ちを果たす筋立てであり、大七は姉妹の仇役である。本図は、造酒之進と大七が対峙する場面を描いたものとされ、刀の柄を握る指先には大七の冷酷さがにじんでいる。黒い雲母を用いた背景に上半身のみを描いた大首絵の形式で、写楽の代表的な28点の大首絵の中でも習作に位置づけられる作品である。(39.5×25.9)

■ 作品送付方法

作品は台紙付で発送いたします。
額縁付作品をご希望の方は¥13,000をご送金ください。
(送料は本財団で負担いたします。)

1 中島 華映

アダチUKIYO大賞 第15回 優秀賞受賞者作品 水底に沈む青



(24.2×33.1)

地上に縛られ生きる自分には、水中という神秘的な世界で自由に泳ぐ魚は憧れでした。鱗に光を反射させながらフリルのようなヒレで泳ぐその姿は、まるで異国のドレスのようにも見えました。そのため、水中や魚を想起させる渦や波、鱗などのモチーフを衣装と掛け合わせて独自の人物を描いています。私にとって作品は「憧れ」であり、自身の葛藤も込めた「鏡」でもあります。感情の変化に波のように身を任せながら、今後も制作していけたらと思います。中島華映

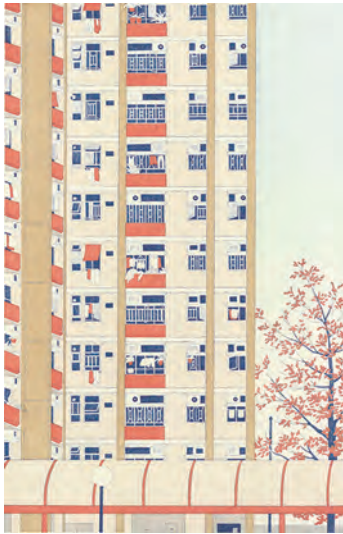
1997年東京生まれ。2016年から本格的に作品制作を開始する。水中のイメージを元に、どの時代や国にも属さないような不思議な衣装を纏った人物を描く。2019年大学を卒業後アートフェア東京に出品(清アートスペースブースにて)し、銀座一兎庵にて初個展を開催する。2021年『美人画づくし 参』(芸術新聞社)に掲載。2024年BSフジ「ブレイク前夜〜次世代の芸術家たち〜」に出演。

2 Carmen Ng

アダチUKIYO大賞 第16回 優秀賞受賞者作品 Neighborhood

日本で浮世絵展を見て深く魅了され、色を重ねて生まれる透明感が水彩に通じる点に強い関心を持ちました。私の作品は、かつて暮らした環境から得た記憶や感覚をもとにしています。規則的な線がつくる理性的な美しさと細部に宿る個性を描きながら、日々の生活に潜む静けさや気配を意識し、窓枠や洗濯物、植木などの小さな要素を通して、人の存在と穏やかな調和の空気感を表現しようとしています。また、こうした風景に自分自身の感情の揺らぎも重ねています。カルメン・ウン

Carmen Ng(カルメン・ウン)は香港を拠点に活動するアーティストで、Art CentralやFine Art Asiaを含む展覧会で作品を発表してきた。水彩を中心に地域コミュニティやブランドとのコラボレーションも行っている。東洋の細密画と西洋の水彩技法に学び、細やかな線と均整の取れた構図を生かして、多様な質感表現に挑んでいる。



(36.0×23.0)

3 田中 一光

ロープ 森



日本を代表するトップデザイナーであった田中一光氏は、簡潔な表現で数々の作品を発表し、現代日本のデザイン分野において多大な影響を与え続けた。本図は、1979年に制作された木版画シリーズ「ロープ」の内の一図である。日本伝統の「結び」を元にしたロープのデザインは、氏が主に1970年代に繰り返し取り組んだアイコニックなモチーフでもある。洗練された色彩感覚と簡潔で狂いのない構図が浮世絵にも通じる省略美を生み出している。(34.8×22.8)

1930年奈良市生まれ。京都市立美術専門学校(現・京都市立芸術大学)卒業。鐘淵紡績、産経新聞を経て、ライトパブリシティに入社。1960年、日本デザインセンター創立に参加後、1963年、田中一光デザイン室を主宰。日本万国博覧会政府館の展示設計や、札幌冬季オリンピック大会、ロンドン「ジャパン スタイル」等の企画、展示設計など幅広い分野で国際的に活躍。2002年逝去。